

浄土真宗の法印

寺川俊昭

一	『教行信証』の志願	三
二	選択本願の行信	八
三	選択本願の機	一六
四	難思議往生	二四
五	真の報仏土	三六
六	浄土真宗の法印	四三

一 『教行信証』の志願

『教行信証』の志願は、師法然の歴史的意義をもつ著作、『選択本願念仏集』の真実義を開顯することにある。このことは、親鸞が『教行信証』後序に、

「仍抑^ヲ悲喜^ヲ之^ヲ涙^ヲ、註^ス由來之^ヲ縁^ヲ」(『定親全・一』三八三頁)

と、無限の感動をこめつつ、『選択集』附属の事実を細かに語っている点からも、われわれの容易にうかがい得ることである。この『選択集』において、法然が果し遂げた歴史的事業が、本宗としての浄土宗の顯揚、いわゆる浄土宗の独立であることは、もはや周知の事柄であって、改めていうをまたない。その事業の内実を、だから私はここで達意的に、末代濁世の凡夫を機として凝視しつつ、選択本願の念仏を法として見出し、そのことによって念仏往生として仏道を開示したのだというところに、『選択集』の積極的主張があるのだと了解しておきたい。

この仕事を果し遂げるに当たって、法然は、長い伝統と圧倒的權威をもつ聖道の諸教、要するに仏教そのものとの一種の緊張関係の中で、法然自身が帰し、わが信念としてもつた選択本願の念仏を、堂々たる仏道の行として主張して行つた。それが浄土宗独立の、具体的状況である。聖道の諸教がまさしき仏道の行として伝承し定立する諸行を、それを支える發菩提心までも含めて雑行と廢捨しつつ、法然は選択本願の念仏をまさに正行とし、純粹なる仏道の行として定立したのであった。いうまでもなく、選択本願の行としての念仏に対する、法然の挙体的帰依によってである。従って法然の念仏の顯揚は、諸行対念仏という、いわゆる行々相對の形をとりつつ遂行されたのであるが、そこに顯著に保持されているのが、法然の妥協することのない廢立の決断であり、一貫するものが選択の本願への純潔な

帰依であつた。あるいはむしろ、諸行を選捨し念仏を選択する本願への純潔な信順が、諸行を廃捨して念仏一行をのみ本願の行として選び取る、法然の鋭角的な念仏の選びを惹き起こしたのだと、了解すべきであらうか。

「夫速欲離生死、二種勝法中、且聞聖道門、選入淨土門。欲入淨土門、正雜二行中、且拋諸雜行、選應歸正行。欲修於正行、正助二業中、猶傍於助業、選應專正定。正定之業者、即是稱仏名、稱名必得生、依仏本願故。」（『定親全・一』六七頁）

このように、親鸞が大きな帰依の念を託して「真宗興隆大祖源空法師」と仰いだ師法然の、まさにその真宗興隆の思想的事業である『選択集』は、聖道浄土相對し、諸行念仏相對する形の中で、選択本願の念仏を法とする念仏往生の仏道を鮮烈に主張したのであつた。しかしながら、はからずもそこに醸成された聖道仏教との緊張關係が、やがて社会的には法然の専修念仏に対する度重なる弾圧を惹起し、更に思想的には、『選択集』そのものが、明恵の『摧邪輪』を始めとする聖道諸師の厳しい論難を受けて、渦巻く批判と誤解の中に投げ出されることとなつたのである。

このような緊迫した状況の中で、真宗興隆の大祖源空法師の教えに値遇した親鸞は、その門徒の一人に加えられることによって、まさしく師法然の真宗興隆の事業に参加するものと自重の思いの中で、選ばれて『選択集』の附屬を受けた者として、その真実義を開顯する志願を自らに課することにより、師教の恩厚に応えて行こうとしたのである。その際親鸞は、『選択集』が開顯した仏教である浄土宗の真実義を、浄土真宗として顯揚するについて、どこまでも法然の念仏往生の教説に値遇して確立した、選択本願の行信という信仰的自覺に立ちつつも、この選択本願の念仏を法とする念仏往生の仏道を継承しながら、更にこれを根源化して、本願の名号に歸し、本願の名号を行信する道を以て、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道であるとしたのであつた。この歴史的な視点を踏まえて、私はこの論

考において、親鸞の浄土真宗についてその独自の積極性を尋ねて行きたい。

親鸞がこのような無上仏道として浄土真宗を語る言葉は、その著作のいたるところに見られるのであるが、私は第一に、『唯信鈔文意』の次の言葉に注意したい。

「やうやうさまざまの大小聖人善惡凡夫の、みづからがみをよしとおもうところをすて、みをたのみず、あしきところをかえりみず、ひとすじに具縛の凡愚屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。」（『定親全・三』一六八頁）

反復熟読すれば自ら明瞭に知られるように、あるいは「大小聖人、善惡凡夫」といわれ、あるいは「具縛の凡愚、屠沽の下類」といわれているものこそ、『大無量壽經』が本願の教えを求める機を表わす言葉として語る、群萌の現実態にほかならない。この群萌を機とし、この「具縛の凡愚、屠沽の下類」に行信せられる「無碍光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号」を法として、「煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたる」仏道として、浄土真宗が展開する。これこそまさに、群萌の一乗というに相應しい、一切苦悩の群生海に成就した無上仏道というに値する仏教の内実ではあるまいか。これが晩年の親鸞が到達していた、浄土真宗の内実である。

この機の凝視に甚深の注意をはらいつつ、私は更に「教巻」冒頭の、浄土真宗の大綱をいわゆる二廻向四法として語る親鸞の了解に、耳を傾けたい。

「謹按^{テスルニ}浄土真宗^ニ、有^リ二種廻向^ノ、一者往相^ニ、二者還相^ニ。就^テ往相廻向^ニ、有^リ真実教行信証^ヲ」（『定親全・一』九頁）

この一文において明確に親鸞は、二種廻向を以て浄土真宗の内実としている。浄土真宗は、二種廻向を以てその内実とする仏道である。この親鸞の了解を尋ねるべく、私は同じ主題についての『浄土文類聚鈔』の文章を、先ず想起

したい。

「然^ル本願力廻向^ノ、有^リ二種^ノ相^ニ。一者^ハ往相^ニ、二者^ハ還相^ニ。」（『定親全・二』一三二頁）

『教行信証』と『浄土文類聚鈔』と、同じ主題を語るこの二著の言葉に依って考えるに、浄土真宗について私は次のような了解を得る。即ち、浄土真宗とは、一言でこれをいい表わすならば、本願力廻向という事実である、ということではあるまいか。その本願力廻向に帰した時、帰した衆生の上に、往還二つの方向をもった運動が始まってくることとなる。勿論、往生浄土、還来穢国の二つの方向である。このような力動的な浄土真宗の核心的事実である本願力廻向について、親鸞は例えばこのような極めて主体的な了解を表白する。

「廻向は、本願の名号をもて十方の衆生にあたへたまう御のりなり。」（『一念多念文意』・『親全・和文篇』一二七頁）
十方の衆生とは、このように衆生を喚ぶ本願に帰した者の自覚として一言で表白するならば、「われら」である。

親鸞はおそらくはより厳密に、「煩惱具足のわれら」（『歎異抄』）といい、「よろずの煩惱にしばられたるわれら」（『唯信鈔文意』）といい、「石、瓦、礫のごとくなるわれら」（『同上』）というであろう。もしこのように読むならば、廻向について語るこの文章で、親鸞がわれわれに告げようとしていることは、廻向とは、本願の名号がわれらに与えられている事実である、ということではなからうか。このことをより強い調子でいい表わすならば、「本願の名号われらにあり」、このように表白される信念のあるところ、それこそが本願力廻向の事実であるということであろう。そしてこの信念が、本願の名号に帰した者をして、往生浄土の一道に立たしめるのであり、やがてまた、如来の還相廻向のはたらく機ともなるのである。

このような意味で、本願の名号こそ、浄土真宗なる仏法の法である。しかもいうまでもないことであるが、本願の

名号はその衆生における現実態は、選択本願の行信にはかならぬ。そして親鸞が本願の名号に帰し、選択本願の行人と転成したのは、親鸞自らが、

「然愚禿釈、建仁辛酉曆、棄雜行兮歸本願。」(『教行信証・後序』・『定親全・一』三八一頁)

と表白した法然の言説との値遇においてであるとするならば、親鸞の本願の名号を以て法とする主張は、何よりも先ず法然の鋭角的信念であった選択本願の念仏の継承であり等流である点に、われわれは甚深の注意を払わなければならぬ。こうして私は、「教巻」冒頭に、本願の名号を以て仏法の体としつつ、そこに成立する二廻向を以て浄土真宗の内実と顕揚した親鸞の発言に、くつきりと法然の教説の影を見、継承を見るのである。

この、本願の名号に帰するところに確立する仏道について、しかしながら、親鸞は、明確に弘誓一乗海といい、誓願一仏乗という法幢をうち建てた。ここに親鸞の独自性があるというべきであらう。

「言一乗海者、一乗者大乗。大乗者仏乗。得一乗者、得阿耨多羅三藐三菩提。阿耨菩提者、即是涅槃界。涅槃界者、即是究竟法身。得究竟法身者、則究竟一乘。无異如来、无異法身、如来即法身。究竟一乗者、即是无边不断。大乘无有二乗三乗、二乗三乗者、入於一乗。一乗者、即第一義乘、唯是誓願一仏乗也。」(『行巻』・『定親全・一』七六頁)

『勝鬘經』の一乗章に依りつつなされたと考えられるこの一乗の解釈が疑問の余地なく明らかに語っているように、真実行に帰するところに確立する仏道を、親鸞は誓願一仏乗、即ち如来の誓願に支えられて実現する一仏乗と了解している。一仏乗とはまた、無上仏道である。この法幢に注意するならば、浄土真宗なる仏法を、われわれは何よりも先ず誓願一仏乗とし、無上仏道とする親鸞の積極的主張の如く了解しなければならないこととなる。

親鸞のこの思索、この顯揚を、より広い視点に立って吟味し総括した、「行巻」結尾の文章が、強く私の心をとらえる。この文において、親鸞は誓願一仏乘というその誓願について、次のように思索を展開する。

「凡就誓願、有真實行信、亦有方便行信。其真實行願者、諸仏称名願。其真信心願者、至信心樂願。斯乃選本願之行信也。其機者則一切善惡・大小凡愚也。往生者則難思議往生也。仏土者則報仏報土也。斯乃誓願不可思議・一実真如海也。『大無量壽經』之宗致、他力真宗之正意也。」（『定親全・一』八四頁）

誓願について思索を始めた親鸞は、遂に浄土真宗の全体、即ち他力真宗の正意を、このように堂々と、しかもくつきりと浮き彫りにする。一見、事項の羅列に過ぎないようであるけれども、浄土真宗の大綱を、親鸞独自の本願理解である真実六願の了解を踏まえて語る見事さにおいて、『教行信証』における一つの高峯であるとの感を禁じ得ない。以下、文を追ってそれがわれわれに語り告げるところを、尋求していきたい。

二 選本願の行信

浄土真宗なる仏法は、一体どこにあるのか。この端的な問に、端的に答えるならば、選本願の行信あるところにある。選本願の行信こそ、衆生の上に成就した浄土真宗の、最も確かにして具体的な事実である。私は先に、二廻向を以て語られる浄土真宗の体について、これを本願力廻向として顯わす親鸞の語ろうとするところを、「本願の名号われらにあり」との確信として了解した。この確信、即ち本願の行信こそ、最も具体的に浄土真宗がそこに生き生きと実現している場所である。この確信を、今、選本願の行信と語るところにもまた、先に一言したような鮮明な法然の弟子としての親鸞の俤を、私は見るのである。この確信を、「念仏申さんと思ひ立つ心」として親鸞に発起

せしめるかけがえのない縁になったものは、師法然の選択本願念仏の教説との値遇であることは、改めていうまでもあるまい。そこにこそ、親鸞が自己の信念として仏法を語る、まさにその立脚点があったからである。

この選択本願の行信を表白して最も正確な言葉は、『願生偈』冒頭の世親の表白、一心帰命にまさるものはないであらう。

「世尊、我一心帰命、ニシタケマツリテ 尽十方無碍光如来、願生安楽国。」

臂頭の「世尊」が、世親が「説願偈総持、与仏教相応」と願った、『無量寿経』の教主世尊への応答であることはいうまでもないが、私にはそれが直ちに、親鸞が「よき人」と無限の謝念をこめて表白する法然への応答と、二重写しになって響いてくる。この点からいえば、一心帰命の本願の信というても、有縁の知識の教説との値遇という、謝念に満ちた感動以外の何ものでもない。と同時にこの感動は、自己が長くその中に迷悶し続けた無明の闇を摧破して、尽十方無碍光の世界に自己を喚び帰す激しく名告り出るものを、深々と自証しているのである。その意味で、この一心帰命の表白において注意すべきは、衆生の信の表白と、如来の名号と、この二つがしかも同一の言葉でなされているということである。帰命尽十方無碍光如来とは、如来の名号であると共に、そのままが本願の廻向成就の信の表白そのものである。本願の信を、行信と了解し表明する所以であらうか。

浄土真宗がそこに実現する場としての選択本願の行信について、親鸞はそこに二つの本願を、その行信を成就するものとして掲げている。いうまでもなく諸仏称名の願と、至心信楽の願である。それについて、一願建立の立場に立った法然が、第十八念仏往生の願をもって選択本願と把握したのに対して、親鸞は第十七諸仏称名の願、及び第十八至心信楽の願の二願として、選択本願を了解したことは周知の事実であり、改めていうまでもあるまい。親鸞が第十

八念仏往生の願より念仏を別開し、第十七諸仏称名の願に名号成就の願を見出したところには、純潔なる選択本願の行者として、熾烈とさえないほかはない念仏一行に生き抜いた法然を、よき人として目の当たり仰いだ親鸞の感銘に満ちた謙虚さが、私には思われてならない。ともあれ、真実の行の願、真実の信の願、この二願について親鸞の了解するところを聞こう。

(一) 真実の行願。

(イ) 大行者則稱スルナリ「無碍光如来名」。斯行即是撰シ諸善法、具セリ諸徳本、極速円満真如一実功德宝海、故名ニ大行。

然斯行者、出タリ於大悲願。即是名諸仏称揚之願、復名諸仏称名之願、復名諸仏咨嗟之願、亦可シ名往相廻向之願、亦可キ名選択称名之願。（『定親全・一』十七頁）

(ロ) 諸仏称名願、『大経』言、設我得ム仏、十方世界無量諸仏、不悉咨嗟シテ称我名者、不シ取正覚。（『同上』十七—十八頁）

(ハ) 又言、我至成ニ仏道、名声超ム十方、究竟シテ摩訶所聞、誓不フ成ラ正覚。為衆開キ宝蔵、広施ク功德宝、常於ニ大衆中、說法師ニ子吼。（『同上』）

(ニ) 願成就文、『経』言、十方恒沙諸仏如来、皆共讚嘆、無量寿仏威神功德不可思議。（『同上』）

(ホ) 仏説諸仏阿弥陀三那三仏薩樓仏檀過度人道経』言、第四願、使ム某作仏時、令ム我名字、皆聞ケル八方上下无央数仏国、皆令ム諸仏各於ニ比丘僧大衆中、説我功德国土之善、諸天人民蜎飛蠕動之類、聞我名字、莫ケム不ニ慈心、欲喜踊躍者、皆令ム来ニ生我國、得是願、乃作仏。不得是願、終不シ作仏。（『同上』十九—二十頁）

(二) 真実の信願。

(イ)斯心、即是出於念仏往生之願。斯大願、名、選択本願、亦名、本願三心之願、復名、至心信樂之願、亦可名、往相信心之願也。(同上) 九六頁

(ロ)至心信樂、本願文、『大經』言、設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。(同上) 九七頁

(ハ)本願成就文、『經』言、諸有衆生、聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退転、唯除五逆、誹謗正法。(同上) 九七―八頁

これらの諸文を反復熟読して、私は親鸞が行信と本願とを、同一の事柄として語っていることに、先ず気づく。真実行とは、

「然斯行者、出於大悲願」

であり、真実信については、

「斯信即是、出於念仏往生之願」

と了解されている。行は、大悲の願たる諸仏称名の願より生まれ出たものとして、諸仏称名の願を根拠とし、また諸仏称名の本願に於いてある行為である。信もまた、念仏往生の願を根拠とし、念仏往生の本願に於いてある信仰的自覚である。行信共に、このように選択本願を根拠とし、選択本願に於いてあるものとして、選択本願と別物ではない。選択本願と行信と、両者は信仰的自覚の根拠と事実として、不二である。ここに親鸞が、誓願・諸仏称名の願・至心信樂の願・選択本願の行信と、これらの諸概念を同義語に使う理由があるというべきであろうか。

第二に、親鸞は選択本願たる第十七、第十八の二願を、選択本願の行信の根拠として顕揚するに当たって、因願の

文のみならず、その成就の文をも併せ引いていることに、私は甚深の注意を払いたい。実はここに私は、前に述べたところのよき人法然に値遇して念仏者と転成し、尽十方無碍光の世界に甦った親鸞の、仏教者としての立脚点を見るからである。確かに親鸞は、称無碍光如来名なる真实行が、諸仏称名の願として自証せられた大悲の願より出で、この大悲の願に於いてあるものと自らの了解を記している。意を取ってこれをいえば、称名なる行為は、諸仏称名という事実より出、それに於いてある行為であるというにほかならぬ。この諸仏称名といい、あるいは諸仏称揚といい、もしくは諸仏咨嗟ということとは、より具体的にいえば、成就の文にいわゆる、

「十方恒沙諸仏如来、皆共讚嘆^ニ 無量寿仏^ニ 威神功德不可思議^{ナルヲ}」

という事実の、凝集的表現にほかならない。この願成就の教説の意味するところが、念仏者法然に真宗興隆の大祖を仰ぎ見た親鸞の、まさにその法然との値遇の根源的光景であることは、私の既に述べた通りである（小著『歎異抄の思想的解明』）。このように解するならば、称無碍光如来名を「出於大悲願」と語ったことは、称名なる行為は、念仏に生きるよき人の、まさにその念仏において無量寿仏の威神功德の不可思議を讃嘆する言説に値遇し、はぐくまれて誕生した行為にほかならぬことを告げる、親鸞独自の了解を厳密に記した文章であることを、私は確かに知ることができる。親鸞が真実の行について語る時、その根拠である第十七大悲の願について、因願のみならずその成就の事実を語る教言をも引く理由は、恐らくここにあるのであろう。むしろ実際としては、願成就の事実に遇って、その感動の中に依って来たった根源を推求し、因位の大悲の本願を自証していったのだというべきであらうか。

この意を補完すべく、親鸞は正依の第十七願の因願の文、成就の文を引くのみならず、更に異訳の『大阿弥陀経』、並びに『平等覚経』の願文を引く。そこには明らかに、無量寿仏の威神功德と安樂浄土の功德莊嚴が、諸仏によって

おのおのその比丘僧大衆、もしくは弟子衆の中において讃嘆され、言説されることが誓われている。法然の教説に遇うてそこに如来の興世を感得した親鸞が、その大きな感動の中に安んじて身を置いた吉水の法然の念仏の会座、それがこの『大阿弥陀経』の説く本願の歴史的現実ではなかったであろうか。真実の行の願たる諸仏称名の願は、根本教説である『大無量寿経』において、その本願及び成就の事実が言説されているのみならず、その歴史的現実とは、吉水の念仏の会座の現前にはかならない。このように解するならば、称無碍光如来名なる選択本願の行が「出於大悲願」と了解されている時、親鸞がわれわれに語ろうとしていることは、称無碍光如来名、即ち本願に帰して念仏するという意味深い行為が衆生に発起するとは、念仏するよき人に値遇し、その会座に身を置くことを決定的な縁とするということである。『歎異抄』の實感に満ちた言葉に依るならば、「念仏申さんと思ひ立つ心」が発起することは、ひとえに「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との、よき人の仰せとの値遇にはぐくまれてである。そして、このことは、真信心なるものの性格を、端的にわれわれに示すこととなる。「念仏申さんと思ひ立つ心」とは、如何にも意味深い表現である。この心が発露して一声の念仏となり、乃至一形を尽くすところの念仏となる。と共に、そのままが一心帰命の本願の信の発起する相である。法然の選択本願の念仏という、いわば行信一如の形で表白される本願の信の面目をそのままに伝えるこの「念仏申さんと思ひ立つ心」が、同時に取りも直さず、一心帰命の信のすがたであることに、私は甚深い意味を感じる。親鸞が真信心について何よりも先ず、

「斯信即是、出於念仏往生之願」

と語るのは、この辺りの消息を伝えるものであろうか。即ち真信心成就を誓う第十八至信心樂の願を、法然の選択本願の了解を端的に示す願名、念仏往生の願としてここに語っているその点に、注意したいのである。

ともあれ、この一心帰命の信、即ち一念の淨信が衆生に發起する縁は、聞其名号なる意味深い出来事にほかならない。このことを示すべく、親鸞は真实行についてと同じように、真實信をそれが於いてある本願を語る場合に、因願と共に成就の文を引いたに違いない。真實信心が「出於念仏往生之願」と了解される中で、因願を説く教言が引かれる点からは、それが至心信樂欲生の願心の廻向成就たる一念の淨信であることが、われわれに告げられている。更に願成就の文が重ねて引文されている点からは、われわれはその一念の淨信が、如来清淨なる願心の廻向成就の一心であることを教えられると共に、ほかならぬこの一心が、「ただ念仏せよ」と選択本願の念仏を語ってやまぬよき人の仰せにはぐくまれ、賜わった根源的覚醒であることを、確かにうなづくことができるのである。だからこそ、親鸞はいう。

「情思教授恩徳、実等弥陀悲願者というは、師主のおしえをおもうに、弥陀の悲願にひとしと也、大師聖人の御おしえの恩おもくふかきことをおもいしるべしと也。粉骨可報之、摧身可謝之というは、大師聖人の御おしえの恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり、身をくだぎても恩徳をむくうべしと也。よくこの和尚のこのおしえを御覽じしるべしと。」（『尊号真像銘文』・『定親全』三 一一四—五頁）

こうして私は、浄土真宗なる仏道がそこに成就する場である選択本願の行信について、親鸞が如何に深い恩徳を師法然に感じつつ語るかについて、ある感銘を覚えつつ、確かに了解することができた。それと共に更に注意すべきことは、自らの帰した選択本願の行信を、よき人の厚い教恩への謝念のもとに表白することが、実はそのまま、自らの一心帰命の信心を、世尊への応答として表白した世親の、あの信の表白の等流であるということである。よき人の仰せ、そこに教主世尊の教えの歴史的現実がある。よき人の仰せに賜わった信、ここに浄土真宗のいちである選択本

願の行信の、最も具体的なすがたがある。

浄土真宗がそこに現成するこの選択本願の行信について、最も注意し明確に了解すべきことは、それがまさしく選択本願の願心の廻向成就であるというその本質である。

「爾者、若行若信、無有^シ一事^ト非^シ阿弥陀如来清淨願心之所廻向成就^ニ、非^ズ無^ニ因他因有^ノ也^ハ。可知。」（「信卷」『定親全・一』一一五頁）

この命題が表わすところの主題を根源的に探求した思索が、「信卷」の三心一心の間答である。その思索を迎えることは、既に小著『歎異抄の思想的解明』において試みたことであるから、ここでは繰返さない。要するにそれは、至心信樂欲生我國の三心を以て表わされる如来の願心と、一心歸命尽十方無碍光如来願生安樂国と表白される衆生の信心とこの二つが位を異にしつつしかも別物ではない、両者はむしろ即一であるという、選択本願の行信の驚くべき秘義の解明であった。即ち、如来清淨なる願心の現実態が、一心歸命なる衆生の行信に外ならず、選択本願の行信の根拠が、取りも直さず如来選択の願心そのものであるという、決定的な自証であったのである。

この探求は、選択本願の行信という事実のもつ、決定的に重要な功能もしくは意味を明白に浮彫りにする。それはこの行信において、如来のまさしく自内証の世界が、衆生に開示せられるということである。もし如来の自内証の世界を、『大無量壽經』に従って「如来智慧海」と語り表わすならば、少くとも三心即一心と覚悟した親鸞の自証においては、深広無涯底なる如来智慧海は、単に衆生にとって言亡慮絶の超越的世界であるにとどまらず、選択本願の行信においてそれは衆生を安立せしめる根源的功能として、衆生に開示せられてあるものとなる。言い換えれば、衆生に現前する信心海の深さは、そして広さは、本願海もしくは大心海の深さ広さと等しく、それは更に、如来智慧海の深

広無涯底であるのと等しいと了解さるべきこととなる。のみならず、敢えて付言すれば、衆生の煩惱海の無底性の自覚と、それは切り離すことのできない密接さを秘めているのではあるまいか。この行信理解があるからこそ、親鸞は自己に発起した行信を、自己よりも大きいものと表白する。

「専奉^{センブ}斯行^{スギョウ}、唯崇^{ユイシュウ}斯信^{スギシン}。」（総序）

三 選択本願の機

さて、この選択本願の行信のところに現成する浄土真宗について、親鸞は前述のように誓願一仏乗として、一切苦悩の群生海に開かれた無上仏道と顕揚した。この選択本願の行信について、親鸞は「行巻」末尾の思索において、更に幾つかの視点からその特質を吟味していく。その文章を、重ねてここに掲げてみよう。

「其^{ソノ}機^キ者^ノ則^ニ、一切善惡大小凡愚也。」

往生者則、難思議往生也。

仏土者則、報仏報土也。」（『定親全・一』八四頁）

親鸞がここに挙げている三つの事柄は、いうまでもなく選択本願の行信の機と、その行信のもたらす利益である往生と、そしてその往生において開示される浄土と、この三つである。

機の擬視、もとよりそこに浄土教の伝統がある。もし法然であれば、既に一言したように、『安樂集』の決定的な時機の擬視、

「当今末法^{ヘニシテニ}、現是五濁惡世^ニ。唯有^{ツテ}浄土一門^ノ可通^キ入路^{スナリ}。」（『選択集』・『真聖全・一』九二九頁）

をその、『選択集』の冒頭に引いていることから明らかなように、きっぱりと、末法濁世の凡夫というであろう。この法然の感化のもとに育った仏教者として、親鸞もまたその生涯の長い遍歴の道程の中で関わらなければならなかったこの世の現実、色濃い末世の相を見たであろうし、その末世の現実を、親鸞の内なる求道心は末法と直視していたことは、疑う余地はない。『正像末和讃』の表白する通りである。

「釈迦如来かくれましたまして

二千余年になりたまう

正像の二時はおわりにき

如来の遺弟悲泣せよ

末法五濁の有情の

行証かなはぬときなれば

釈迦の遺法ことごとく

龍宮にいりたまいにき」(『定親全・二』一五九頁)

ただし、一つ注意しておきたいことがある。それは、親鸞は末法という言葉が表わす鋭敏な歴史感覚をもちつつも、いわゆる末法史観に立っていたというよりも、却って在世正法、像末法滅の時を一貫する本願史観というべき立場に立っていたと了解すべきではないか、ということである。勿論親鸞は、釈尊入滅時からの年代計算までして、現在がまさしく末法の時であることを確認している。

「按三時教者、勘如来般涅槃時代、当周第五主穆王五十一年壬申。從其壬申、至我元仁元年甲申、二千一

百八十三歳也。又依賢劫経、仁王経・涅槃等説、已以入末法、六百八十三歳也。（『化身土巻』・『定親全』・一）三
一四頁

その、時代が末法の只中にある世のしるしとして、親鸞は何をみていたのか。これは一つの問題である。暫く『正像末和讃』の語るところを聞こう。

「正像末の三時には

弥陀の本願ひろまれり

像季末法のこの世には

諸善龍宮にいらたまう。

大集経にときたまう

この世は第五の五百年

闍諍堅固なるゆえに

白法隠滞したまえり。

有情の邪見熾盛にて

叢林棘刺のごとくなり

念仏の信者を疑謗して

破懷瞋毒さかりなり。

命濁中天刹那にて

依正二報滅亡し

背正帰邪まさるゆえ

横にあだをぞおこしける。

五濁の時機いたりては

道俗ともにあらそいて

念仏信ずるひとをみて

疑謗破滅さかりなり。

菩提をうまじきひとはみな

専修念仏にあだをなす

頓教毀滅のしるしには

生死の大海きはもなし

像末五濁の世となりて

釈迦の遺教かくれしむ

弥陀の悲願ひろまりて

念仏往生さかりなり」。『定親全・二』一六〇—七頁

これらの和讃は、共通してただ一つのことを語っているようである。即ちそれは、選択本願の念仏に対する、無理解なるままの弾圧にはかならない。親鸞自身が体験し、大きな公憤を秘めつつ蔽しい文章を以て石に刻みつけるよう

に「後序」に書き記した、あの承元の法難を中心とする、度重なる専修念仏に対する誹謗であり、毀滅の行為であり、それが濁巻く時代の姿である。この事実が、一人の仏教者として親鸞が大きな悲痛の中に凝視していた、末法の世のしるしではなかったであろうか。親鸞が『末法灯明記』を引く理由もここにあったのであろう。更に

「爾者、穢惡濁世群生、不知末代、盲瞶、毀僧尼威儀、今時道俗、思量已分。」（『化身土卷』、『定親全』・一）三三三頁

と訴える時見据えていた現実も、恐らくはここにあったのではあるまいか。悲痛すべきは、釈尊のみ名のもとにある仏教者が、しかもまさにその釈尊の大悲によって念仏する仏教者に毀謗の行為をなして止まぬことである。そしてここに、親鸞がまじまじと凝視した釈迦教の悲劇的運命があったのである。

一つの根本的な直覚によって、親鸞はこの悲劇を突破した。それは、

「然愚禿親鸞、建仁辛酉曆、棄難行、今歸本願。」

と表白した、師法然の選択本願念仏の教説との値遇が開いた直覚である。この直覚において如来の選択本願を仏教の真宗として自証した時、親鸞は仏教を釈迦教とするある意味での固執から、完全に自由となることができたのであった。そこには善導の二尊教の思想が、確かな指針としてあったというべきかも知れない。この時釈尊は、色身をもった歴史上の存在でありつつ、しかも同時に久遠の本仏であるとされるような絶対性の主張を脱して、

「如来所以興出世、唯說彌陀本願海。」

といわれるように、三世十方の無量の諸仏の一仏として、われらを弥陀本願海に帰入すべく発遣する、一人の応化仏という確かな地位を以て仰がれることとなったのである。

のみならず、釈尊が応化仏と仰がれるならば、われらを本願海に発遣する応化仏は、ひとり釈尊に止どまらないこととなる。七祖通じてそうであり、殊に親鸞にとって、深い因縁で結ばれた法然こそ、最も身近に仰がれた応化仏にほかならない。事実、親鸞がそのような意味で法然を仰いでいたことは、例えば次の和讃によっても疑いようもなく明らかである。

釈尊の恩徳。

「娑婆永劫の苦をすてて

浄土無為を期すること

本師釈迦のちからなり

長時に慈恩を報ずべし」(『高僧和讃』・『定親全』二 一一〇頁)

法然の恩徳。

「曠劫多生のあいだにも

出離の強縁しらざりき

本師源空いまさずば

このたびむなしくすぎなまし」(『同上』二二八頁)

釈尊と法然が、全く同じ恩徳において仰がれていることが、一読して強く響いてくるであろう。本来釈尊に捧げられるべき本師という尊称をそのまま法然に捧げている点からしても、このことは否定しようもなく明白である。ということは、親鸞は法然の仰せに遇うて、そこに如来の興世をまざまざと感得し、そのことにおいて実は釈尊の末法とい

う仏教者にとって痛みに満ちた歴史的现实の問題性を、はっきりと克服したのだということではあるまいか。釈尊は懐旧的追憶の中にあるのではなく、その弥陀本願海に発遣して止まぬ応化仏としての仕事は、七祖によって、そして殊に今法然の仰せにおいて、生き生きと継承せられ、今現に果たされている。こうして釈迦仏が明確にわれらのために世に出興せられた応化仏として仰ぎみられた時、無数の応化の諸仏によって継承せられた発遣の仕事は、釈迦仏の末法を超えて、常に現在前する弥陀本願海にわれらを帰入せしめ、立たしめることとなった。反対に、釈迦仏の威神力を絶対視する聖道の諸教は、ほかならぬその聖道の修道の全てを支えている釈迦仏の威神力の衰滅していく嚴肅な歴史の状況の中にありつつも、そのことに無自覚であるからこそ、釈迦仏の末法の痛みの中に浄土の一門に帰して専修念仏を行ずる法然を、「仏法の怨敵」とののしって毀謗止むことなく、却ていよいよ末法の相を濃くしている。この悲劇的事態を願海に帰入して突破した親鸞は、だからこそこう喝破する。

「信知、聖道諸教、為在世正法、而全非像末法滅之時機、己失時乖機也。浄土真宗者、在世・正法・像末・法滅、濁悪群萌、斉悲引也。」（化身土巻）『定親全・一』三〇九—一〇頁

親鸞が選択本願の行信の機を、前引したように「一切善悪、大小凡愚」という時、それはこのような鋭い末法の自覚を媒介としつつ、まさに応化の諸仏善知識の教えによって選択の願海に帰して行くべき、一切の衆生、言い換えれば、在世正法、像末法滅という歴史の諸状況を貫いて生きる濁悪の群萌、これを意味するものであることを、私は知った。その機について、親鸞は、

「然按一乘海之機、金剛信心絶対不二之機也。可知。」（行巻）『定親全・一』八二頁

と、浮彫りにする。これを鋭角的な自覚として表現すれば、「信巻」に所謂「一切苦惱の群生海」というべきであらう。

うか。あるいはまたあの機の深信における信知、「自身現是罪惡生死凡夫」というべきであらうか。この鋭角的な機の自覺を核心に見据えつつ、「正信偈」は「一切善惡、大小凡愚」なるものを、「一切善惡凡夫人」と語ったのであらう。『唯信鈔文意』はより現実的に、「具縛の凡夫、屠沽の下類」と語ったに違いない。『歎異抄』は極めて含蓄的に「弥陀の本願には、老少、善惡の人をえらばれず、ただ信心を要とすとするべし。」と語った。その意を、「行卷」は堂々と、

「明知、是非凡夫自力之行、故名不廻向之行也。大小聖人、重輕惡人、皆同齊サシツク應オウ歸キ」選セン採サイ大宝海、念仏成ニル仏ニル。」（『定親全・一』六七頁）

と宣言する。ここに明らかに、皆同じく齊しく、応に選採の願海に歸すべき大小の聖人、重輕の惡人と語られているものの、『歎異抄』に所謂、老少、善惡の人について、私は改めて、『歎異抄』第三章の含蓄深い教説を思う。そこには周知のように、

「善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。」

と語られている。ここに所謂惡人が、まさに機の深信においてある人であり、廻心懺悔の機であることは、周知の通りである。罪惡深重の機の信知こそ、本願の正機である。しかしながら、ここで善人といわれている者、即ち自力作善の人もまた、その「自力の心をひるがえて他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐる」のである。こうして親鸞は、絶対不二の機、即ち機の深信の鋭角的な自覺の深さを内に秘めつつ、今、まさに選採の大宝海に歸すべき選採本願の行信の機を、「一切善惡、大小凡愚」と、その広さにおいてわれわれに告げているのであった。

四 難思議往生

この機に賜わる選択本願の行信の利益、それを親鸞は難思議往生として、明確に語りかけている。先に考察したように、『歎異抄』はこれを、「真実報土の往生」として告げているが、難思議往生といい、真実報土の往生といい、この独自の言葉を用いて往生を語るところには、浄土教における最も根本的な宗教的要求であるこの往生について、親鸞が独自の積極的な了解をもっていることを、われわれに語りかけるものである。それ故に私は第一に、晩年の親鸞が往生について独自の考察を行った思索である『浄土三経往生文類』が語る難思議往生の了解に、先ず耳を傾けよう。

「大経往生というは、如来選択の本願、不可思議の願海、これを他力と申すなり。これ即ち念仏往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり。現生に正定聚の位に住して、必ず真実報土に至る。これは阿弥陀如来の往相廻向の真因なるが故に、無上涅槃のさとりを開く。これを大経の宗致とす。このゆえに大経往生と申す。また難思議往生とまうすなり。

この如来の往相廻向につきて、真実の行業あり。すなわち諸仏称名の悲願にあらわれたり。称名の悲願は、大無量寿経にのたまはく、

設我得仏、十方世界無量諸仏、不悉咨嗟称我名者、不取正覺。文
称名信樂悲願成就文、経言、

十方恒沙諸仏如来、皆共讚嘆無量寿仏威神功德不可思議。諸有衆生、聞其名号信心歡喜乃至一念、至心廻向、願生彼国即得往生住不退転、唯除五逆誹謗正法。文

また真実信心あり、すなわち念仏往生の悲願にあらわれたり。信樂の悲願は、大經にのたまはく、
設我得仏、十方衆生、至心信樂欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。唯除五逆誹謗正法。文
同本異訳無量壽如來會言。

若我証得無上覺時、余仏刹中諸有情類、聞我名已、所有善根心心廻向、願生我國、乃至十念、若不生者不取菩提。唯除造無間惡業、誹謗正法及諸聖人。文

また真実証果あり。すなわち、必至滅度の悲願にあらわれたり。証果の悲願、大經にのたまはく。

設我得仏、国中人天、不住定聚必至滅度者、不取正覺。文

同本異訳無量壽如來會言、

若我成仏、国中有情、若不決定成等正覺、証大涅槃者、不取菩提。文

無量壽如來會言、

他方仏国諸有衆生、聞無量壽如來名号、能発一念淨信、歡喜愛樂、所有善根廻向、願生無量壽国者、隨願皆生得不退轉乃至無上正等菩提。除五無間誹謗正法及謗聖者。

必至滅度・証大涅槃願成就文。大經言。

其有衆生生彼国者、皆悉住於正定之聚、所以者何、彼仏國中、無諸邪聚及不定聚。文

又、如來會言。

彼国衆生若当生者、皆悉究竟無上菩提、到涅槃處、何以故、若邪定聚及不定聚、不能了知建立彼因故。已上抄要

この真実の称名と、真実の信樂をえたる人は、すなわち正定聚のくらいに住せしめむとちかいたまへるなり。この正定聚に住するを、等正覺をなるとものたまえるなり。等正覺とまうすは、すなわち補処の弥勒菩薩とおなじくらいとなると、ときたまえり。しかれば大經には、次如弥勒とのたまえり。

浄土論曰。

莊嚴妙声功德成就者、偈言、梵声悟深遠・微妙聞十方故、此云何不思議。經言、若人但聞彼国土清淨安樂、剋念願生、亦得往生即入正定聚。此是国土名字為仏事、安可思議。乃至

莊嚴眷族功德成就者、偈言、如来淨華衆、正覺華化生故、此云何不思議。凡是雜生世界、若胎若卵、若湿若化、眷族若干苦樂万品、以雜業故。彼安樂国土、莫非是阿弥陀如来正覺淨華之所化生、同一念仏無別道故、遠通夫四海之内皆為兄弟也、眷族無量、焉可思議。

又言。

願往生者、本則三三之品、今無一二之殊、亦如溜澠食陵反一味、焉可思議。已上

又論曰。

莊嚴清淨功德成就者、偈言、觀彼世界相、勝過三界道故。比云何不思議、有凡夫人煩惱成就、亦得生彼淨土、三界繫業畢竟不牽、則是不断煩惱得涅槃分、焉可思議。已上抄要

この阿弥陀如来の往相廻向の選択本願をみたてまつるなり。これを難思議往生とまうす。これをこころえて他力には義なきを義とすとするべし。

二還相廻向というは、浄土論曰、以本願力廻向故、是名出第五門。これは還相の廻向なり。一生補処の悲願に

あらわれたり。

大慈大悲の願。大経にのたまはく。

設我得仏、他方国土諸菩薩衆、來生我國、究竟必至一生補處、除其本願自在所化、為衆生故被弘誓鎧、積累德本度脫一切、遊諸仏國修菩薩行、供養十方諸仏如來、開化恆沙無量衆生、使立無上正真之道、超出常倫、諸地之行現前、修習普賢之德、若不爾者不取正覺。文

この悲願は、如來の還相廻向の御ちかいなり。

如來の二種の廻向によりて、真實の信樂をうる人は、かならず正定聚のくらいに住するがゆえに、他力とまうすなり。『定親全・三』二一八頁

今、私が考察の依り所としている、「行卷」末尾の眞宗大綱を語る親鸞の了解と完全に呼応しつつ、親鸞が大経往生といい、難思議往生という眞實報土の往生の風光を見事に語って、さながら息をのむ思いである。親鸞はここに、眞實報土の往生を支え実現せしめるものとして、第十七、第十八、第十一及び第二十二の四願を掲げている。しかも例の如く因願及び成就の文をあげて。これによってわれわれは、親鸞の所謂難思議の往生がいかなる質をもった宗教生活であるかを、誠に的確に了解することができるであらう。要をとってこれをいえば、諸仏称名の願において成就する本願の名号に帰した眞實の信樂に、無上大般涅槃の功德が生き生きと用ぎ、その用ぎにおいて眞實の信樂を得た人を現生に正定聚の位に住せしめる。親鸞は明確に、現生正定聚を以て眞實報土の往生を内容づけたのであった。浄土眞宗における往生を尋ねる時、われわれは往生についての凡ゆる先入観を棄てて、親鸞のこの積極的往生理解に決定的に依らなければならないのであらう。

さて、この難思議往生の解明の中で、親鸞は如来の往相廻向について語っている。私はここで再び、前述した「教巻」冒頭に掲げられたあの命題を想起しなければならない。即ち、

「就^{イテ}往相廻向^ニ、有^リ真実教行信証^ニ」。

なる了解である。難思議往生の解明の中では、如来の往相廻向について、真実の行業あり、また真実信心ありと、行信の二をあげているが、具にはやはり教行信証の四法をあげるべきであろうか。要するに、如来の廻向に帰して往相の一道に立つ時、それを支えている四つの契機として真実の教行信証を親鸞は掲げたのである。

この、往相廻向を支える真実の教行信証について、『教行信証』が語る親鸞の了解をみよう。私はこれによって、親鸞が往生を現生正定聚を以て内容づけた根拠が、露堂々と開示されていることを知って、瞠目の思いを禁ずることができない。

(一) 真実教についての了解。

- (1) 如来興世之正説
 - (2) 奇特最勝之妙典
 - (3) 一乗究竟之極説
 - (4) 速疾円融之金言
 - (5) 十方称讃之誠言
 - (6) 時機純熟之真教
- (二) 真実行についての了解

- (1) 選択摂取之本願
 - (2) 超世希有之勝行
 - (3) 円融真妙之正法
 - (4) 至極無碍之大行
 - (5) 円融至徳嘉号
 - (6) 真如一実功德宝海
- （目） 真実信についての了解
- (1) 長生不死之神方
 - (2) 忻浄厭穢之妙術
 - (3) 選択廻向之直心
 - (4) 利他深広之信楽
 - (5) 金剛不壊之真心
 - (6) 易往無人之浄信
 - (7) 心光摂護之一心
 - (8) 希有最勝之大信
 - (9) 世間難信之捷徑
 - (10) 証大涅槃之真因

(11) 極速円融之白道

(12) 真如一実之信海

四 真実証についての了解

(1) 利他円満之妙位

(2) 無上涅槃之極果

閉目開目してこの解釈を誦誦する時、教、行、信、証の四法とも皆等しく、大般涅槃道を衆生に開示する法であることが、くっきりと浮彫りになってくるのを感じる。これらの意味づけの中で、私は今、真実教については一乗究竟の極説・速疾円融の金言の二を、真実行については円融真妙の正法・至極無碍の大行・円融至徳の嘉号・真如一実の功德宝海の四を、真実信については証大涅槃の真因、極速円融の白道・真如一実の信海の三を、そして真実証については無上涅槃の極果の一を、殊に積極的な重要さをもつものとして、注意したいのである。

通観する時、浄土教の基本概念と共に、大乘仏教の修道がその長い歴史において鍛え、そして磨き上げた自覚を表わす用語を駆使して親鸞は思索し、そして真実の教・行・信・証を以て支えられている往生の一道という、本願の名号が実現する自覚道を意味づけていることが、直ちにうなづかれるであろう。それについて、繰り返し用いられている円融、真如一実、大涅槃の三つの言葉が、殊に私の心を惹く。

親鸞は教・行・信について、円融の徳をあげている。天台教学の基礎概念であるこの言葉に、親鸞はどんな自覚を託したのであろうか。

「この要門、仮門より、もろもろの衆生をすすめこしらえて、本願一乗・円融無碍、真実功德大宝海におしえす

すめいたまうがゆえに、よろづの自力の善業おぼ、方便の門とまうすなり。いま一乗とまうすは、本願なり。円融とまうすは、よろづの功德善根みちみちてかくることなし、自在なるころなり。無碍とまうすは、煩惱悪業にさえられず、やぶられぬというなり。真実功德とまうすは、名号なり。一実真如の妙理円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如とまうすは、無上大涅槃なり。涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。宝海とまうすは、よろづの衆生をきらはず、さわりなくへだてず、みちびきたまうを、大海のみづのへだてなきに譬えたまえるなり。』(『一念多念文意』定親全・三 一四五頁)

円融についてこのように思索するその文脈をたどるならば、よろづの功德善根みちみちてかくることなしという事実、しかも、煩惱、悪業に障えられぬ功德善根の用きの事実とは、取りも直さず実は無上涅槃の功德、もしくは用らぎをいうにはかならない。善悪相對する、人間的努力によって修せられ行ぜられる善根を意味するのではなく、善の善なるもの、勝義における善である無上涅槃の清淨真実なる功德を、よろずの善根みちみちて欠くることなしと、親鸞は了解し解釈したに違いない。

円融という言葉の語義は、完全に対立し質を異にするものが、しかも分かち難く一つになる、と解せられる。対立する異質のものが、しかも一如であるということが、円融というこの言葉の語義であろう。それについて、この対立する異質のものを、今、親鸞が「信巻」に展開した思索によって尋ねるならば、私は何よりも先ず、如来なるものと衆生なるもの、即ちその質において清淨真実なるものと、穢惡汚染なるものとの二つであると了解したい。この二つが、しかも一如であるということが、「信巻」の思索によって了解される、円融という言葉の表わす自覚内容なのであるまいか。

清浄にして真実なるもの、それは何よりも畢竟寂滅する無上涅槃の徳であり、それを相とする真実報土の功徳である。それ故にまた、如来そのものの莊嚴功徳である。そのまさに功徳という点から、この清浄真実は、清浄にして真実なるものと、名詞として訓むことができる言葉であると共に、やはりより根源的には、清浄ならしめ真実ならしめるものと、動詞的に訓むべき言葉ではあるまいか。とするならば、この清浄ならしめ真実ならしめるはたらきは、端的に、如来の清浄真実ならしめるはたらきを被ったところに、自証せられているにほかならぬ。取りも直さず、穢悪汚染の自覚である。穢悪汚染という、我執においてあるものの深い懺悔は、この清浄真実なる如来無上涅槃の功徳の自覚・自証である。煩惱にまみれてしか生きることのできぬわれらは、久遠劫来、如来に背いて流転し続けたわが本性を、真実の教に歸し、また真実の行信に歸して、今初めて穢悪汚染なるものと白日のもとに懺悔し、自覚するのである。取りも直さず、それが清浄真実ならしめるものの自証であろう。私は直ちに、「能発一念喜愛心、不断煩惱得涅槃」という「正信偈」の感銘深い一句を想起するのであるが、浄土の清浄功徳を、真実信心において自証することを表白するこの一句において、親鸞が「不断煩惱」と表白する時、そこにはいかにしても断煩惱であり得ない身の一つの深い痛みを秘めた自覚が告げられているに違いない。この自覚を機としてそこにはたらく功徳、それが清浄真実と表白されているのであろう。穢悪汚染なるものと、清浄真実なるものと、この二つが、二つ並んであるのではないのであろう。むしろ一つの自覚の二つの契機と、了解することのできるものである。しかも、如来はあくまでも清浄真実と讃嘆さるべきものであり、われら衆生は、どこまでも穢悪汚染と懺悔するほかはないものである。この二つが、異質でありつつしかも一如である。このような質をもつ、真実なる行信の功徳を、親鸞は円融という伝統の術語に託したのではなからうか。

例えば「信卷」の思索を辿りつつ、もしこのように推求することができれば、重ねていえば、それは真実の行信における無上涅槃の功德の自証である。そして、これが親鸞においては、明晰な、しかも生き生きとした体験としての自証であったことを、よくわれわれに告げているのが、この円融と共に親鸞が反復するところの、あの真如一実という、極めて含蓄深い、しかも感動と確信に溢れた一語であった。

先に引文した『一念多念文意』において、親鸞は確かに、「一実真如とまうすは無上涅槃なり」と、明確な了解を告げている。注意すべきは、無上涅槃である一実真如を、親鸞は一つの理念として了解しているのではなく、真実の行信、即ち本願の行信において実現するもの、生き生きとはたらくもの、と了解している事実である。因みに、このことを語る親鸞のあの確信に満ちた、独自の了解に耳を傾けよう。

「観仏本願力、遇無空過者というは、如来の本願力をみそなわずに、願力を信ずるひとはむなしくここにとどまらずと也。能令速満足、功德大宝海というは、能はよしという、令はせしむという、速はすみやかにとしという。よく本願力を信樂する人は、すみやかにとく功德の大宝海を、信ずる人のそのみに満足せしむる也。如来の功德のきわなくひろくおおきにへだてなきことを、大海のみずのへだてなくみちみてるがごとしとたとえてまつるなり。」（『尊号真像銘文』『定親全・三』八八―九頁）

「浄土論曰観仏本願力、遇無空過者、能令速満足、功德大宝海とのたまへり。この文のころは、仏の本願力を観ずるに、まうおうてむなしくすぐるひとなし、よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむとのたまへり。観は願力をころにうかべみるとまうす、またしるというころなり。遇はまうあうという、まうあうとまうすは、本願力を信ずるなり。無はなしという。空はむなしくという。過はすぐるといふ。者はひとという。むなしくす

ぐるひとなしというは、信心あらむひと、むなく生死にとどまることなしとなり。能はよくという。令はせしむという。よしという。速はすみやかにという、ときことというなり。満はみつという。足はたりぬという。功德とまうすは名号なり。大宝海はよろづの善根功德みちきまるを、海にたとえたまう。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめむとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえるなり。」（『一念多念文意』・『定観全・三』一四六―八頁）

「真実功德とまうすは、名号なり。一実真如の妙理円満せるがゆへに、大宝海にたとえたまうなり。一実真如とまうすは無上大涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如来なり。宝海とまうすは、よろづの衆生をきらはず、さわりなくへだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまへるなり。」（『一念多念文意』・『定観全・三』一四五頁）

『浄土論』に明かされた安樂浄土の不虛作住持功德を註釈する、親鸞のこれらの諸文によって、われわれは疑問の余地なく明らかに、本願の行信に帰した人の身に、法爾自然に自証せられ、そして生き生きと実現しはたらくものが、一実真如なる無上涅槃の功德であることを、親鸞は告げていることを知ることができる。もとより、煩惱具足の身のままに、無上涅槃を証したといっているのではない。そんな夢想を画いているのではない。煩惱にまみれて生きるわが身を、穢悪汚染の身、罪惡の身と自覚せしめつつ、その自覚である本願の行信を機として、如来の清浄真実なる無上涅槃の功德は、如実に現前し、はたらくのだと自証したのである。それが、「専奉斯行、唯崇斯信」と讃嘆した本願の行信の、感動に満ちた豊かな体験の、正確無比な自覚内容の表白であった。何故に、かくも大胆不敵な無上涅槃

の功德についての自証が、語られ得るのか。その秘密を解いた親鸞の推求が、上述の、

「爾者、若行若信、無有^{シヨト}一事^{トシタルコト}、非^ニ阿弥陀如来清淨願心之所^ニ廻向成就^{シタマフ}。非^ニ無^ニ因^ノ他^ノ因有^ニ也^ハ。可^シ知^ル。」（「信
卷」『定親全・一』一一五頁）

という、行信を以て、如来清淨願心の廻向成就とする、独自の驚くべき信仰理解であつたと考えられる。あるいはまた、より直接的には、本願の行信に帰したその感動に満ちた体験が自証するものが、如来の不虛作住持の功德であることを、『淨土論』の教説によつて親鸞は確かに自覚することができたからであると、いうべきであらうか。

ともかくこのようにして、私は親鸞が本願の名号に帰した端的に実現する往相の一道について、それを支える真実の教、行、信、証について、そこに円融、真如一実、証大涅槃という、いずれも無上涅槃の功德を表わす極めて積極的にして重要な自覚を以て性格づけた意味を、知ることができた。だからこそ、往生の一道は、大般涅槃道である。あるいは、大般涅槃道に支えられて人生は、往生の一道という質をもつこととなるのである。このことを明確に語る、晩年の親鸞の了解を聞こう。

「如来尊号甚分明、十方世界普流行、
但有称名皆得往、觀音勢至自来迎

如来尊号甚分明。このころは、如来とまふすは無碍光如来なり。尊号とまふすは、南無阿弥陀仏なり。尊はたふとくすぐれたりとなり。号は仏になりたまふてのちの御名をまふす、名はいまだ仏になりたまはぬときの御なをまふすなり。この如来の尊号は、不可称・不可説・不可思議にましまして、一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ、大慈大悲のちかひの御なり。この仏の御なは、よろづの如来の名号にすぐれたまへり、これ

すなわち誓願なるがゆへなり。』（『唯信鈔文意』『定親全・三』一五六頁）

「自力のころをすつといふは、やうやうさまさまの大小聖人・善悪凡夫の、みづからがみをよしとおもふころをすて、みをたのまず、あしきころををかへりみず、ひとすぢに具縛の凡愚・屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願・広大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。』（『同右』一六七―八頁）これが真実報土の往生、即ち難思議往生の風光である。一見してそこには、通念的に理解されているような往生は、一言も語られてはいない。端的に大涅槃道が語られているだけである。しかし、このような大般涅槃道という自覚道が、難思議往生の往生道の内実である。敢えていえば、親鸞は大般涅槃道を以て、往生道を内容づけたのであった。往生道のほかに、大般涅槃道があるのではない。また、端的に大般涅槃道であるような往生道こそ、真実報土の往生である。親鸞の往生についてこのような了解を迎えることによって、私は親鸞が現生正定聚を以て難思議往生の実質とした理由を、ほぼ正確に知ることができるようになる。正定聚とは必至滅度の位であろうが、これを信心の利益として現生に身証し確立したところに、親鸞独自の積極性があることは、改めていうまでもあるまい。親鸞は、行信の利益として現生には正定聚に住し、命終って浄土に往生するといっているのではあるまい。むしろ、現生正定聚を以て往生の実質とし、このような実質をもつ往生を難思議の往生と呼び、現生の命終って未来に往生するというような往生觀を化土往生と批判し区別することを通してこれを真実報土の往生としたのであった。

「真実信人の行人は、撰取不捨の故に正定聚の位に住す。この故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし。信心の定まるとき、往生また定まるなり。來迎の儀式をまたず。正念といふは、本弘誓願の信樂定まるをいふなり。この信心を獲るゆえに、必ず無上涅槃に到るなり。この信心を一心という。この一心を金剛心という。この金剛

心を大菩提心というなり。これ即ち他力のなかの他力なり。」(『末灯抄』、『定親全・三』五九頁)

「又言。

其仏本願力、聞名欲往生、皆悉到彼国、自致不退転と。

其仏本願力というは、弥陀の本願力とまふす也。聞名欲往生というは、聞というは如来のちかひの御なを信ずとまふす也。欲往生というは、安樂淨刹にむまれむとおもえとなり。皆悉到彼国というは、御ちかひのみなを信じてむまれむとおもう人は、みなもれずかの淨土にいたるとまふす御こと也。自致不退転というは、自はおのづからという、おのづからというは、衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらいにいたらしむとなり、自然ということば也。致というは、いたるとすという、むねとすという。如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退のくらいにいたらしむるをむねとすとおもえと也。不退というは、仏にかならずなるべきみとさだまるくらい也。これすなわち、正定聚のくらいにいたるをむねとすべしと、ときたまえる御のりなり。」(『尊号真像銘文』、『定親全・

三』七六—七頁)

「願力摂得往生というは、大願業力摂取して往生をえしむといえるころ也。すでに尋常のとき信樂をえたる人という也。臨終のときはじめて信樂決定して摂取にあづかるものにはあらず。ひごろかの心光に摂護せられまいらせたるゆえに、金剛心をえたる人は正定聚に往するゆえに、臨終のときにあらず、かねて尋常のときよりつねに摂護してすてたまはざれば、摂得往生とまふす也。」(『尊号真像銘文』、『定親全・三』九六頁)

「真實信心をうれば、すなわち無碍光仏の御ころのうちに摂取して、すてたまはざるなり。摂はをさめたまふ、取はむかへとるとまふすなり。をさめとりたまふとき、すなわち、とき日をもへだてず、正定聚のくらいにつき

さだまるを、往生をうとはのたまへるなり。』(『一念多念文意』、『定親全・三』一二七―八頁)

「この二尊の御のりをみたまつるに、すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらいにさだまるを、不退転に住すとはのたまへるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず無上大涅槃にいたるべき身となるがゆえに、等正覚をなるともとき、阿毗跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるともきたまふ。即時入必定ともまふすなり、この真実信業は他力横超の金剛心なり。」(『一念多念文意』、『定親全・三』一二九―一三〇頁)

同じ内容の文章は、一々挙げるにいとまがないほど、しばしば親鸞によって記されている。これを前に引文した『浄土三経往生文類』における難思議往生についての親鸞の明確な了解と読み合わせる時、われわれは疑う余地なく明らかに、私が先に縷説したように、親鸞は往生浄土の最も積極的にして重要な内容として、現生に正定聚の位につき定まることと了解し、主張していたことを知ることができる。従つてわれわれは、親鸞が「行巻」に、一切善惡、大小凡愚に賜わる選択本願の行信の利益を、難思議往生と語る時、その往生の内容については、凡ゆる予見を放棄して、以上のように語り告げる親鸞の難思議往生の了解、即ち現生正定聚を以て真実報土の往生の実質とする了解を、素直に、そして正確に受けとめなければならないのであらう。

五 眞の報仏土

往生とは、浄土を開示された生の意味である。難思議往生とは、真実報土を開示された生の意味である。当然親鸞は、その難思議往生に開示された浄土を、

「仏土者則、報仏報土也。」

と、本願酬報の眞実報土であるとの了解を、明確に告知している。「真仏土卷」はそれを広説して、次のようにいう。
「謹按眞仏土者、仏者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也。然則酬報大悲誓願故、曰眞報仏土。既而有願、即光明壽命之願是也。」（『定親全・一』二二七頁）

この私釈の中で、親鸞が仏・土、即ち如來及び淨土を成就する本願として、從來撰法身の願と了解されてきた第十二光明無量の願、第十三壽命無量の願の二願を挙げた意味、即ち如來自身の成就を誓う本願を以て、直ちにまた淨土を成就する本願とした意味については、既に小著『歎異抄の思想的解明』において考察したことであるから、ここで再説することは避けたい。ただ一つ注意すべきことは、仏を不可思議光仏と表白し、淨土を無量光明土と表白し、この二が別物ではないこと、換言すれば不可思議光仏なる如來に、親鸞は無量光明土なる淨土の意味を見出したことを述べるのであるが、この仏土共に無量光を以て表白されている点である。疑う余地なく明らかに、このことは、仏、土といつてもそれは、歸命尽十方無碍光如來と表白される選択本願の行信に開示され、自証せられている光明のはたきであり、世界であることを物語っている。その際、親鸞の用語例においては、周知のように、光は智慧と同義語であるから、無量の光明の世界とは、そのまま無限の智慧の境界ということにほかなるまい。してみると、それは如來智慧海と同義となる。如來智慧海はそのまま、実は無上涅槃の世界と別ではない。果して眞実報土としての淨土を、端的に無量光明土と表白した親鸞は、從來伝承せられた、さまざまな具象的表現を以て語られる、凡ゆる淨土の莊嚴を捨象して、「真仏土卷」においては、端的に広大無辺際なる無上涅槃の世界として淨土の功德を語り通すのであった。そしていわゆる指方立相を以て語られる淨土の莊嚴功德は、挙げてこれを化仏化土の相として位置づけたのである。この透徹した親鸞の淨土理解の積極さに、私は反復縷説する無上仏道としての淨土眞宗という、彼の仏教理解の

根源的性格をはっきりとみるのである。

さて、このように真の報仏、報土を無量光明土として明かし、その功德を無上涅槃として明らかにする「真仏土巻」の引文の中で、私は暫く、二三の特徴的な引文に注意したい。その第一は、引文の最初に引かれる『大経』の第十二願成就の文である。

「仏告阿難、無量寿仏、威神光明、最尊第一、諸仏光明所不能及。乃至、是故無量寿仏、号無量光仏、無辺光仏、無碍光仏、無对光仏、炎王光仏、清浄光仏・歡喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏。其有衆生遇斯光者、三垢消滅、身意柔軟、歡喜踊躍、善心生焉。若在三塗懃苦之处、见此光明、皆得休息、無復苦惱、寿終之後皆蒙解脱。」（『定親全・一』二二八頁）

その第二は、『浄土論註』の次の文である。

「何者、莊嚴不虛作住持功德成就偈言、觀仏本願力、遇無空過者、能令速満足、功德大宝海故。不虛作住持功德成就者、蓋是阿弥陀如来本願力也。乃至所言不虛作住持者、依本法藏菩薩四十八願、今日阿弥陀如来自在神力、願以成力、力以就願、願不徒然、力不虛設、力願相府畢竟不差、故曰成就。」（『同上』二五四頁）

第一の光明無量の願成就の文の告げるところは、大悲の願である光明無量の願に酬報した如来の威神光明を以て、衆生の安慰のあるところとするということである。真実報土の功德を挙げる引文の第一に、「若し三塗懃苦の処にありて、この光明を見れば、皆休息を得て、また苦惱なけん」と、衆生の安慰の処としての徳を掲げていることは、親鸞が浄土の意味を端的にこの点において了解していたことを告げて、誠に私の心をひくものがある。浄土が無上涅槃の

世界であるとは、苦悩する凡夫のその深い悲しみが、無上涅槃のはたらきをもつ無碍の光りによって、寂滅して行くということであろうか。のみならず、この引文において注意すべきは、眞実報土という意味をもつ、無碍光仏の光明に遇う場所は、三塗懃苦の処だということである。三塗懃苦の処とは、苦悩するこの人生の真只中である。もとよりまさしくいえば無量光明土である眞実報土は、それ自身如来と体一つなるものとして、衆生にとっては超越的世界であらう。「彼岸の世界」とは、その超越性をよく表わす浄土の理解である。しかしながら、帰命尽十方無碍光如来、願生安樂國なる選択本願の行信においては、それは決して単に超越的であるのではない。それは、如来清淨なる願心の廻向成就としての本願の行信において、無碍光の利益として、現実の人生の只中において自証せられるものにほかならない。勿論、穢土を以て直ちに浄土とすることはできない。そんなことは苦悩する身という現実を忘れた夢想に過ぎぬ。しかし、無量光明土である不可思議光如来のその光りに、三塗懃苦の処において遇うのだと『大經』は語り、親鸞もそれを感銘深く聞思しつつ、眞実報土を明す引文の最初に引いた。もとよりそこには、選択本願の行信に歸した親鸞の体験の自証するところの深い意味を、親鸞に告げ、自覺的にしたものがあったからにほかなるまい。この点に注意していえば、眞実の浄土とは、大悲する無碍光のはたらく領域と了解すべきではあるまいか。

全く同じことが、第二に注意した、『論註』の不虛作住持功德について解釈するところを、親鸞が「眞仏土卷」に引文しているところにも窮われる。この功德については、私の了解するところを既に述べたことであるが、安樂浄土の眞如一実の功德宝海をその身に満足するものは、仏の本願力に値遇した金剛心の行人である。仏の本願力に値遇するのは、いうまでもなくこの人生の只中にほかならず、従って安樂浄土の不虛作住持功德を自証する場合は、この人生を生きる凡夫の行信である。もし清沢満之師の表現をかりれば、不虛作住持功德としてはたらく浄土は、「内とも限

るべからず、外とも限るべからず」であって、本願力に値遇して無碍光に帰した行信に、生き生きと自証され、また生き生きと現前しはたらく徳用である。浄土もしくは真実報土という世界があつて、そこに二十九種莊嚴功德があると構想するよりも、二十九種の莊嚴功德のはたらく世界を、安樂浄土と呼ぶのだと了解する方が、より自覺的であろう。今、親鸞が別して真実報土の徳用を表わす引文として、不虛作住持功德を語る文を以てする所以は、よく本願力を信樂する金剛心の行人の身に、法爾自然に真如一実の無上涅槃の功德を現前せしめるところの、この不虛作住持の功德のはたらく境界、そこそ真実報土というべきだという了解を、親鸞が基本的に持っていたからこそではあるまいか。

選択本願の行信に開示される仏土について、親鸞が報仏報土と了解するところを尋ねれば、ほぼ以上の如くである。いささかの神話の影も留めず、しかも大安慰の世界として煩惱にまみれて生きる身の重さを軽やかに転成せしめつつ、

「観彼世界相 勝過三界道

究竟如虚空 廣大無辺際」

なる安樂浄土が、このように透明な自覺として体験され、表白されているところに、私は感嘆の思いを禁じ得ない。

六 浄土真宗の法印

浄土真宗がそこに現前する事実である選択本願の行信について、「行巻」巻末の思索において、親鸞はそれを以上のように、機、往生そして仏土の三つの視点から考察し、解明している。その上で、この選択本願の行信の積極性を、「斯^レ乃誓願不可思議・一実真如海也。」と顕揚する。私はこの「誓願不可思議・一実真如海」

という一句を以て、誓願一仏乗なる無上仏道としての浄土真宗の法印と了解するものである。

法印、それは仏教の面目である。如来なる仏陀が法輪を転ぜられたとは、鮮明なる法印をもつ説法がなされたということである。しかも如来の御言葉は如実の言であり、その点からすればむしろ、鮮明なる法印即ち法の旗印をもつ言説のなされるところ、そこに仏教ありというべきであろうか。のみならず、仏教の歴史を通観するならば、激測とした宗教的生命に満ちた仏教運動が展開する時には、常にそこに鮮明な法印が堂々と押し立てられたという強い印象を、私は禁じ得ない。

三法印もしくは四法印とは、仏教のこのような法印の代表的なものである。一切行無常・一切行無我・涅槃寂靜、乃至は諸行無常、諸法無我、一切皆苦、涅槃寂靜として掲げられた法印は、ここに仏教ありという最初の歴史的法印であり、しかもそれは恐らくは外道に対して、仏教がその独自の積極的な教説の旗印として選び、掲げ、そしてこの法印のもとに、苦なる人生の真只中に除苦悩の寂靜の道を開顯した仏教は、その法輪を転じて行ったに違いない。

諸法因縁生の故に空との、龍樹に帰せられる大乘仏教の根本命題も、このような大乘の仏教運動の法印として了解することができるのであるが、このインドに展開した大乘仏教が、中国的風土の中にいわゆる中国大乘として展開した時、そこに極めて確信に満ちた一つの法印が掲げられたことに、今は注意したい。いうまでもなく一法印もしくは一実相印と理解されるところの、諸法実相という根本命題である。そしてこの諸法実相なる法印を掲げて、中国大乘はそこに一乗という極めて独自の、積極的な大乘仏教の思想を展開したのであった。

極めて概括的ではあるが、仏教の教説の特色である法印を、このように仏教の思想的運動の鮮明な旗印だと理解する視点に立ってみると、古く三法印がありまた一実相印があったと同じように、日本仏教の一高峰である法然や親鸞

の仕事についてもまた、その信念を表わす根本命題が、法印として把えられる筈ではなからうか。このように尋ねて私は、『選択集』冒頭のあの宣言にも似た法然の仏教の根本命題、「南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本」に、法然の仏教運動の鋭角的な法印を見出したのである。旗色鮮明な、断つたる響きをもつこの一句は、法然のあの浄土宗独立を象徴するような、文字通り旗印と呼ぶにふさわしい、実践的な法印ということができないであらうか。

全く同じ意味で、私は親鸞の浄土真宗の開頭についても、独自の法印を見たいのである。いやむしろ、見るべきだと思う。その際親鸞は法然の厚い教恩のもとにありつつも、法然の浄土宗なる仏法を祖述したのではなく、その真実義を浄土真宗として開顕するに当たって、誓願一仏乗なる無上仏道という強烈な自己理解をもつことについては、既に触れた。誓願一仏乗、即ち誓願を根拠とし、誓願に支えられて成就する一仏乗という主張に、甚深の注意を払うべきである。そして、選択本願の行信を自覚的立脚地とする浄土真宗が、まさに誓願一仏乗といい、弘誓一乗海と呼ぶに値する大乘の自覚道であることは、これまでの考察によって既に充分に明らかな通りである。

既に誓願一仏乗であるならば、恰も中国大乘の諸宗が諸法実相印を掲げて自ら一乗の仏法であることを名告ったように、浄土真宗もまた一乗の法印たる一実相印をもつ筈である。こうして私は、親鸞が「大無量寿経の宗致、他力真宗の正意」とする浄土真宗について、「誓願不可思議・一実真如海」とするその一実真如海に、諸法実相即ち一法印を見るのである。親鸞の真如乃至は実相についての転釈をみても、恐らくこのように了解することは許されるであろう。ただし、諸法実相即ち一実真如は、まさしく一乗の法印であるけれども、敢えていえば一乗一般の法印であって、浄土真宗の独自性を充分に顕揚したということではできぬかも知れない。その浄土真宗の積極的な独自性を十二分に顕揚するものが、誓願不可思議なる一句である。そしてこの一句をまっぴら、一実真如即ち真実もまた、浄土真宗なる無上

仏道の核心的事実を開顯する一句という、独自の積極的意味を表わす重要な言葉となる。要するにそれは、誓願不可思議を道理として、その誓願の行信において一実真如即ち無上涅槃の功用を衆生に開示し、そのことによって一切苦悩の群生海を煩惱を具足したまま大般涅槃道に立たしめるといふ、まさしく群萌の一乗を告げる高らかな凱歌にも似た、無上仏道の旗印である。

誓願不可思議、ここに浄土真宗の独自性がある。これに対して一実真如海は、無上涅槃界を表わす言葉であり、無上仏道の自覚の積極的内容である。この一実真如を衆生の上に開示し、溢れんばかりにはたらかしめる道理が誓願不可思議であり、誓願不可思議に帰入した時、衆生の上に法爾自然にはたらいてくるものが、真如一実の功德である。「行巻」は一乗を嘆息して、次のように見事にいう。

「敬白^{ケイハク}一切往生人等^{イツツウジョウジントウ}、弘誓一乗海者^{コウシツツツツミ}成就^{シュジョウ}無碍・無辺・最勝・深妙・不可説・不可称・不可思議、至徳^{シツトク}何^{ナニ}以故^{イコ}、誓願不可思議^{セツガンフカシギ}故^{ユヘ}。」（『定親全・一』八二頁）

この嘆息によってもまた、誓願一仏乗が成就する廣大無辺の功德の実現を支えているものが、誓願不可思議という道理であることが、明らかに告げられていることを知るのである。

この誓願不思議という言葉に、親鸞は如何なる自覚を託したのであろうか。暫く親鸞自身の語るところに耳を傾けよう。一体、親鸞の信心理解においては、従来浄土の徳と了解されていたことを信心の徳として把握するところに、その積極的な特色があることは、既に先輩の指摘する通りである。例えば曇鸞によって、

「註論曰、莊嚴清淨功德成就者、偈言^{ヒトコト}觀彼世界相、勝過三界道故^{カンヒセカイサウ、シヨウダクサンカイダウコ}、此云何不思議^{コノイハナニフカシギ}、有凡夫人煩惱成就^{ユフフジンボウノルシュ}、亦得生彼淨土^{モトメニソノソトニ}、三界繫業畢竟不牽^{サンカイケツギノクニシテ}、則是不^{ナラバ}斷煩惱得涅槃分^{ハナハシラズニボウノルヲシテ}、焉可思議^{ナニヲシテ}。」（『定親全・一』二五〇頁）

と、不断煩惱得涅槃分と了解された浄土の清浄功德は、親鸞にあっては、例えば『正信偈』に、

「能^ハ發^ス 一念喜愛心^ニ」 不^レ斷^セ煩惱得^ル 涅槃^ニ」

と語るように、全く信心の徳として、ある積極性を以て自証せられているのである。このような親鸞の信仰理解、即ち浄土の功德と信心の功德との一如性を、『一念多念文意』の次の註釈は、見事に示している。

「浄土論に曰く。経言、若人但聞彼国土、清浄安楽、剋念願生、亦得往生、即入正定聚、此是国土、名字為仏事、安可思議とのたまえり。この文のころは、もしひと、ひとへにかのくにの清浄安楽なるをききて、剋念してむまれむとねがふひと、またすでに往生をえたるひと、すなわち正定聚にいるなり。これはこれ、かのくにの名字をきくに、さだめて仏事をなす、いづくんぞ思議すべきやとのたまへるなり。安楽浄土の不可称、不可説、不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとするべしとなり。」（『定親全・三』一三二―二三頁）

ここに明確に表白されている「安楽浄土の不可称・不可説・不可思議の徳を、もとめず、しらざるに信ずる人にえしむとするべしとなり」という了解に、私は注意したい。この一句が、上述の浄土の功德と信心の功德との一如性という親鸞独自の了解を、よく表わす言葉であるが、この言葉は直ちに私に、あの

「功德とまふすは名号なり、大宝海はよろづの善根功德みちぎわまるを海にたとへたまふ。この功德をよく信ずるひとのころのうちに、すみやかにとくみちたりぬとしらしめむとなり。しかれば、金剛心のひとは、しらすもとめざるに、功德の大宝そのみにみちみつがゆへに、大宝海とたとえるなり。」（『一念多念文意』・『定親全・三』

一四七―八頁）

と語られる、親鸞の不虛作住持功德についての註釈を想起せしめる。たまたま想起したこの二つの文章によって推求

するならば、浄土の功德と信心の功德の一如性、即ち信心に浄土の功德が現前するという驚くべき事実、その事実を支えている道理が、実は不虛作住持功德ではないか、こういう了解をわれわれに許すようである。この『一念多念文意』の註釈の中で、親鸞は安樂浄土の不可称、不可説、不可思議の徳という。まさにこの安樂浄土の不可思議の徳について、「真仏土卷」における、親鸞の了解を聞こう。

「然五不思議中仏法最不可思議。仏能使聲聞復生無上道心、真不可思議之至也。又云不可思議力者捻指彼仏国土十七種莊嚴功德力不可思議也。諸経説言、有五種不可思議、一者衆生多少不可思議、二者業力不可思議、三者龍力不可思議、四者禪定力不可思議、五者仏法力不可思議。此中仏土不可思議有二種力、一者業力、謂法藏菩薩出世善根大願業力所成、二者正覺阿彌陀法王善住持力所撰。」（『定親全・一』二五二―三頁）

ここで曇鸞の註解に依りつつ親鸞が語るところは、一読して明らかなように、安樂浄土の不可思議という事実、もしくは功德を成就し保持しているものとして、法藏菩薩の本願力と阿彌陀如來の自在神力の二を挙げるべきだという了解なのである。しかるに、この願力と仏力の二を以てまさしく了解するべきものは、安樂浄土の不虛作住持功德に外ならない。

「又云、何者莊嚴不虛作住持功德成就、偈言、觀仏本願力、過無空過者、能令速満足功德大宝海故。不虛作住持功德成就者、蓋是阿彌陀如來本願力也。乃至所言不虛作住持者、依本法藏菩薩四十八願、今日阿彌陀如來自在神力。願以成力、力以就願、願不徒然力不虛設、力願相府畢竟不差、故曰成就。」（『真仏土卷』・『定親全・一』二五四頁）

これらの諸文を引いて思索し、推求し、またある積極的な自証の内容を語ろうとしている親鸞の告げようとするところ

ろを尋ねるに、安樂浄土の徳を不可思議と表わすその不可思議と、不虛作住持功徳とは密接不可分の關係があり、いわば不虛作住持功徳のはたらきを、不可思議という言葉に託して語ったのではないであらうか。その不虛作住持功徳について、私は既に前節の考察で、選択本願の行信において自証せられるものという了解をもつことができた。その要点は、よく本願力に値遇したものは、そこに開かれた選択本願の行信に、如来の真如一実の功徳宝海が、溢れんばかりに現前しはたらくという、驚くべき感動の事実であった。この選択本願の行信に自証せられる功徳と、安樂浄土の不可思議の功徳とが一如であるとするならば、親鸞が誓願不可思議というその自覚の事実の核心も、この辺りにあることがうなづけて来るのである。要するにそれは、如来の誓願に帰した根源的覚醒即ち選択本願の行信に、如来の浄土の一実真如の功徳が溢れんばかりに現前するという、感動的自覚の表白である。こうして親鸞は、選択本願の行信に立って、そこに自証せられる仏道の確信を、誓願不可思議、一実真如海と、堂々と宣言することとなった。ここに私は、高らかに掲げられた誓願一仏乗なる浄土真宗の法印を、くつきりと仰ぐのである。

このような法印を以て顕揚される無上仏道の自覚道を、親鸞は「大無量寿經の宗致、他力真宗の正意」と表白する。聞名という意味深い行爲において、群萌の上に仏道を成就しようとする『大無量寿經』の教えによって、大乘無上の法門は、かくも具体的に、かくも端的に、しかもかくも広大無辺なる自覚をたたえた「わが信念」として、衆生の上に実現した。それを親鸞は、浄土真宗と呼んだのである。